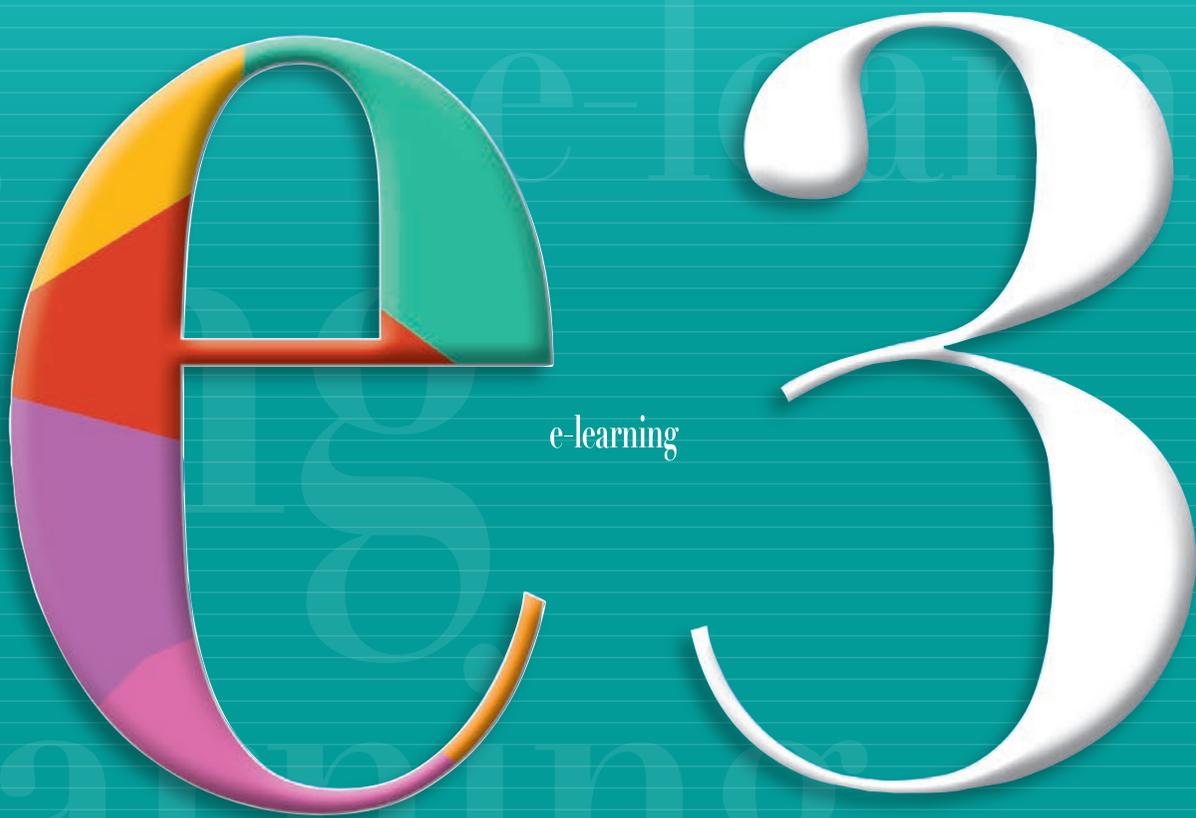


日本摂食嚥下リハビリテーション学会 eラーニング対応

第3分野

摂食嚥下障害の
評価—Ver.2

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 編集



医歯薬出版株式会社

- ・主訴・病歴・問診の目的，意義がわかる
- ・主訴・病歴・問診の実際がわかる

▶ Chapter 1

病歴聴取・問診(医療面接)の目的 → (eラーニング▶スライド1, 2)

主訴から摂食嚥下障害が疑われる場合，詳細に病歴を聴取し問診を行うことで，見逃されていた摂食嚥下障害が発見されることがある。摂食嚥下障害は口腔から胃までの幅広い経路において，精神的なものから痛まで多岐にわたる原因が考えられるため，医療面接による絞り込みは，摂食嚥下障害の診断を進める第一歩であり，スクリーニングとしての役割も担っている(表1)。

特に脳血管障害の既往，神経筋疾患，頭頸部痛などがある場合，摂食嚥下障害の存在を常に念頭に置いて病歴聴取および問診に当たる必要がある。高齢者の診療に際しては，明らかな既往歴がない場合も，加齢による嚥下予備能の低下を念頭に置き診療に臨むべきである。

1. 摂食嚥下障害のスクリーニング
2. 見逃されていた摂食嚥下障害の発見
3. 摂食嚥下障害の原因診断の足がかり

表1 病歴聴取・問診の目的

▶ Chapter 1の確認事項 ▶ eラーニング スライド1, 2対応

- 1 障害診断という観点における問診の重要性を理解する。

▶ Chapter 2

摂食嚥下障害の主訴1—先行期～口腔期の障害が疑われる訴え—

→ (eラーニング▶スライド3)

摂食嚥下障害の診察は，患者および介護者の主訴を聞くことから始める。一般的な先行期～口腔期の障害の際にみられる主訴を以下に列挙する(色文字は咽頭期，食道期の障害と共通)。

- 1) 食物が口からこぼれる
- 2) 口腔内が乾燥する
- 3) 食物が噛みづらい
- 4) 咀嚼に時間がかかる
- 5) 飲み込みづらい
- 6) 自発的に食べない(拒食がある)
- 7) 口腔内に食物が残る
- 8) 食事時間が以前より延長した
- 9) 体重が以前より減少した

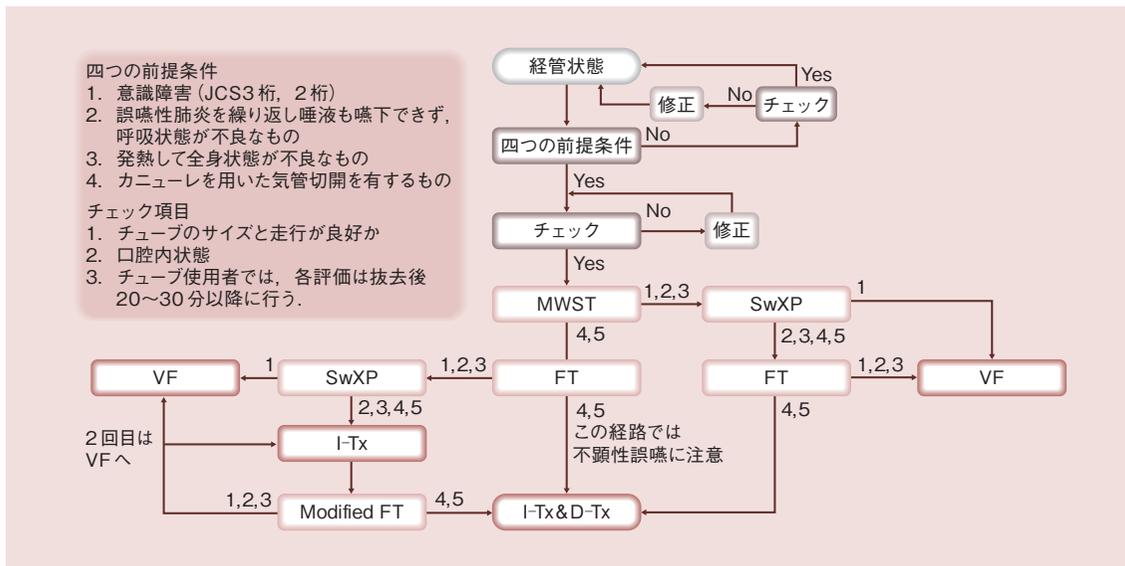


図7 非VF系摂食嚥下障害評価フローチャート

四つの前提条件に当てはまらずチェック項目をクリアした患者のみ臨床的テストに進む。ゴールは「VFによる精査が必要」または「直接訓練開始可能」のいずれかになっている。MWST：改訂水飲みテスト、FT：フードテスト、SwXP：嚥下前後レントゲン撮影、I-Tx：Indirectly Training and Exercise (間接訓練；indirect therapy)、D-Tx：Directly Training and Exercise (直接訓練；direct therapy)、Modified FT：体位などを調整したフードテスト

チャート中の各スクリーニング後の経路を決定する1から5までの数字は、各スクリーニングの評価基準を表す。

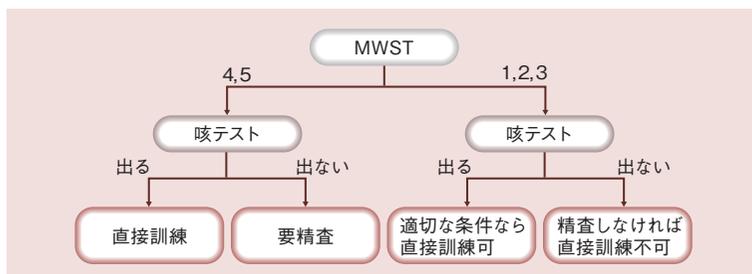


図8 咳テストとMWSTの組み合わせ
1～5の数字は、MWSTの評価基準を表す。

▶ Chapter 12 **スクリーニングテストの考え方** (表2) → (eラーニング▶スライド14)

スクリーニングテストを使用する際には、それぞれのテストは大まかな状態を把握するまでのものであることを知ったうえで使う。また、あるテストで状態が不良であると判断された場合にも、別のテストではよい結果が出る可能性もある。たとえば表2中の例1のような症例にいくつかのテストを行ってみると、唾液の嚥下は困難であるが食物の誤嚥は心配なさそうなことが想像される。また例2では、自発的な嚥下は可能であるも不顕性誤嚥の可能性が高いと考えられる。

▶ Chapter 13 **スクリーニングテストの適用の仕方** → (eラーニング▶スライド15)

テストとして用いる場合には、誰がどのようなタイミングで使用するかをある程度決めておくといよい。それにより、摂食嚥下障害への介入が行いやすくなる。

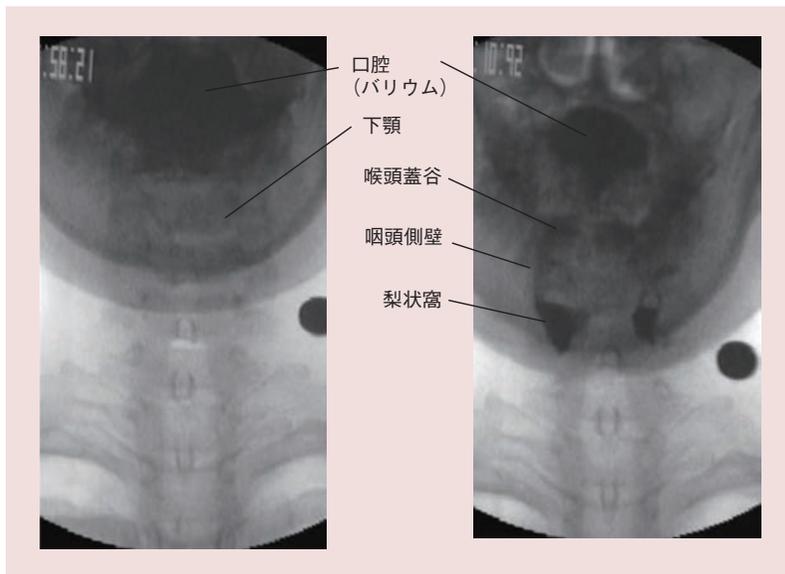


図2 嚥下造影でみる解剖(正面)

なお、これは健常な人にわざと嚥下を遅らせるように指示して飲ませたもので、通常はこのようには映らない。

▶ Chapter 3の確認事項 ▶ eラーニング スライド5対応

- 1 VFに必要な解剖学的知識を身につける。

▶ Chapter 4 **正常の嚥下造影 液体嚥下(10mL 側面)** → (eラーニング▶スライド6)

図3は、10mLの水様のバリウムを命令嚥下したときの様子である。食塊の先端が喉頭蓋谷に接触する直前ぐらいの時点で舌骨がすばやく動き始めていることに注意して観察してほしい。喉頭が挙上している最中は、喉頭前庭部が完全閉鎖し、空気像が消失している。これは、喉頭閉鎖が完全であるという所見である。

▶ Chapter 4の確認事項 ▶ eラーニング スライド6対応

- 1 命令嚥下の特徴をVF像で理解する。

▶ Chapter 5 **正常の嚥下造影 液体嚥下(10mL 正面)** → (eラーニング▶スライド7)

図4は、液体命令嚥下の正面像である。通常の飲み方なので、喉頭蓋谷や梨状窩は区別するのが困難である。この人はほとんど左右差がない。

▶ Chapter 5の確認事項 ▶ eラーニング スライド7対応

- 1 命令嚥下の特徴をVF像で理解する。